

◆六月十八日午後十時二十分過ぎ、山形県沖を震源地とする地震が起きた。山形市は横揺れがしばらく続いたものの大したことはなかったが、新潟や山形県庄内地方で被害があったもよう。三十一の震災より揺れが大きかった地域もあるらしい。一九六四年六月十六日の新潟地震を思い出した。くしくも二日違い。この先、余震もあるだろう。気持ちの準備だけはしておかねばならない。

◆凶らずも、今号は猫の話が二つとなった。「猫八態」は、福島県伊達市に住んでいる池田桂一さんの作品で、家に居ついた複数の猫をよく観察し、その様子を短歌にしている。また、「猫と人のはなし」は、山形県山形市の河内愛子さんのエッセイ。こちらは猫というより、猫にかかわる人の考え方、生き方を描いた文章である。まえに猫を飼っていた身としては、どちらもわかるし、どちらも面白く、考えさせられる内容だ。いまでも「ペットロス」で片づけたくない、さまざまな思いがあることに気がついた。

◆このところ介護に関する話題をよく聞くようになった。介護施設の人手不足も理解しているつもりだ。つれあいの母は九十四歳で、三年前から地元の町のグループホームにお世話になっている。ちよつとしたことで入院してから、一人暮らしはもう無理だろうと施設に入ってもらった。グルー

プホームとは、地域密着型サービスの一つで、認知症高齢者を対象に少人数で共同生活をする施設。その施設から月一回、写真入りのお便りが届く。担当より一言という欄に、手書きの美しい文字でこうあった。「入浴時、腕を洗いながら『○○さんの手は器用な手がいいですね』と申しましたら、『オレ（私）は器用ではないけれど、人は何でも挑戦してみることが大事だ。そして、いっしょうけんめいやってみると思つてたよりできるものだ。そうやってこの齢まできたんだ』と。人生訓を教えてくださいだいたいの思いです。認知症の中にあつても、こういった話を引き出していけるよう支援して参りますので、今後よろしくお願い致します」。たしかに義母の手は大きいですが、料理でも何でも上手だ。子どものころから家業の仕立て屋を手伝って半纏などの厚物を縫い、嫁いでも毎日バスで通つて仕事をしてきた人だ。手を見ながら話しかけた。この担当者でなければ、このことばは出てこない。なんとありがたい出会いであろうか。人との出会いというのは、何歳になつてもあるものなのだ。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊展景 94号

二〇一九年六月二十五日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―一七―二〇一

info@muninokai.com